

春は花 夏ほととぎす 秋は月

冬雪さえて すずしかりけり (道元)

桜の開花便りが北上しはじめ、吹き抜ける風の中にも春の暖かさを感じる頃となりました。

四季折々の風情を楽しみ、季節を表す和歌には、日本人の感性の素晴らしさを感じます。当然のごとく四季は巡ってきますが、人生の四季は片道切符です。人生の四季「青春、朱夏、白秋、玄冬」精一杯生きることは、次代を生きしていく子どもたちに何かを残していくことにもつながります。

「居安思危」という言葉があります。「安きに居りて危うきを思う」と読み、平安無事なときにも危機への対応を怠らない、という意味です。「思則有備(思えばすなわち備えあり)」と続き、さらに「有備無患(備えあれば憂いなし)」に続きます。

「すまんなあ!お前一人になるな。いいか、これからは、

“おかげさま、おかげさま”と心で唱えて生きていきなさい。そうすると必ずみんなが助けてくれるから“おかげさま”をお守りにして生きていくのだよ:”

“おかげさま”の言葉を「おまもり」として旅立った親の言葉です。その言葉が子ども心に光を灯し、生きる力になっていきます。「おかげさま」のお守りは、やがて、子どもを幸せにしてくれます。

親ならば一人前になるまで見守りたいですが、それが叶わない人生もあります。逆縁という言葉があります。親にとって子どもに先立たれる程、苦しく悲しいことはありません。

東日本大震災から4年。癒やすことのできない、それぞれの悲しみがあります。過疎が進み、近所に空き屋の多い集落を訪れたことがあります。「寂しいでしょう」と尋ねる

と、こんな言葉が返ってきました。

「空き家が多くなっても、なんとか生活はできますが、あいさつをする相手がいらないというのはつらいものです」

「ありがたい。おかげさま」の声を届けられないことが一番寂しいです。人という漢字は、お互いが支え合って生きていくとの意味のようです。

指宿の美しい浜辺を散歩しながら、先の東日本大震災の時のような津波が押し寄せたらどうなるだろうか、と思うことでした。

「居安思危」、心したいと思えます。

指宿市長 豊留悦男

